

史跡山王囲遺跡保存管理計画書

1976.3

宮城県栗原郡一迫町教育委員会

目 次

I 保存管理計画策定の目的	2
① 一迫町の現況	2
② 指定の経緯	6
II 遺跡の考察	7
① 山王廻遺跡の位置と周辺の遺跡	7
② 山王廻遺跡に関する過去の調査	8
③ 表面観察の結果	8
④ 土 器	9
⑤ 石 器	9
④ ポーリング調査の結果	12
⑤ 遺跡の構造的理解	17
III 保存管理の方針	20

1. 本調査は東北大学文学部考古学研究室が、昭和50年11月13日から11月21日まで実施し、山王廻遺跡管理計画策定計のための調査についてまとめたものである。
2. 本調査の作成について資料整理はおもに岡村道雄があたった。図版の作成は、阿部朝衛、桑月 鮑、藤原妃敏、吉岡恭平、岡村がおこなった。遺物の縮尺はすべて3分の2である。柱状図は20分の1、平面図は1250分の1に縮めてある。
3. IIおよびIIIを岡村が、③を阿部・吉岡が、④を藤原が執筆し、これを岡村が編集した。
4. なお分布調査資料、県教委の試掘調査資料については、一迫町教育委員会、宮城県教育委員会の助力を得た。

5. 調査団の編成

宮城県栗原郡一迫町教育委員会

調査担当者 東北大学教授岸沢長介

調査員 岡村道雄、永井美行、飯島義雄、阿部朝衛、桑月 鮑、小林和彦、佐藤則之、
藤原妃敏、吉岡恭平



第1図 道野内の御文・券を時代の遺跡(太線)に對照、No.5(左)、No.5(右)、平安時代に属する

I 保存管理計画策定の目的

山土西遺跡には、縄文時代後期から初期弥生文化層に至る移行が、層位的に判明する包含層があり、泥炭層からは、籠胎漆器や編布などを出土し、極めて貴重な遺跡である。

縄文時代に、既にすぐれた文化が開化したと考えられ、祖先の偉大な生活文化の所産としてのこの遺跡を、後世にわたってすえ永く保護するため、一迫町過疎地域振興計画、及び一迫町総合計画基本構想の中にも、史跡公園としての保存整備地区としてその万全を期する方針であるので、ここにその管理計画策定をするものである。

① 一迫町の現況

昭和30年4月、一迫町は町村合併促進法によって、一迫町、金田村、長崎村と、姫松村の一部が合併して出発し、その後昭和31年8月栗駒町の一部（外の沢、権平地区）を編入し、今日に至っている。

一迫町は宮城県の北部地帯に属し、仙台市の西北70kmに位置にある。

南部は玉造郡に境を接し、北部から東部にかけては、栗駒町、築館町、高清水町と、西部は花山村、鶴沢町と隣接して、東西16.7km、南北9.4km、総面積87.93km²で米を基幹作物とした農山村地帯である。

国定公園の秀峰栗駒山の峡谷を源流とする一迫川が、町の中心を東に流れ、半坦肥沃な耕土を潤し、その河川をはさむように緩傾斜の丘陵が連なっている。

気候は北ぐにのわりに積雪は少なく、月平均の降雨量は90mm、平均気温は11°Cという住みごこちのよい町であるが、ご多聞にもれず過疎化が進行している。

1) 世帯と人口について

年 度	世 帯	人 口
昭和30年	2,541戸	16,604人
昭和40年	2,617戸	13,747人
昭和45年	2,575戸	12,130人
昭和50年	2,609戸	11,170人

2) 産業と経済について

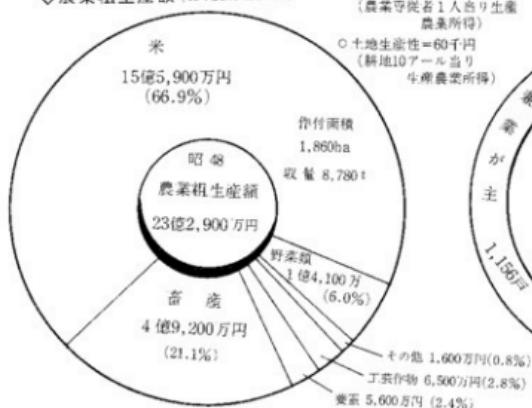
産業の動向へ本町の産業は、稻作を中心とした農業が主であり、昭和45年から大型農業化を目指した構造改善事業が行なわれるなど、その体質改善が着々と進められている。然し、昭和42年に全産業所得の49%を占めていた農業も、近年きびしい経済情勢の変化により、逐年、2次、3次産業が増大し、昭和47年には34%に低下し、農外所得の依存度が高くなっている。

産業・経済



農業

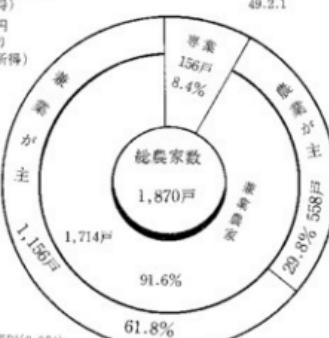
◇ 農業粗生産額 (48年農業所得統計)



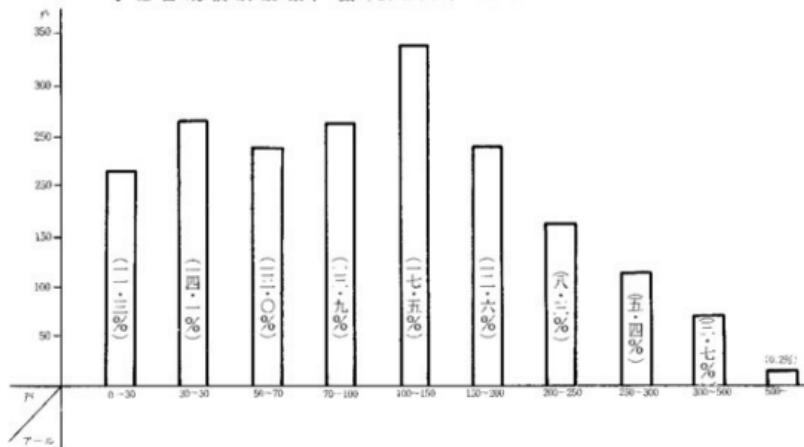
○ 分動牛生産 = 653千円
(農業生産者 1人当たり生産
農業所得)

○ 土地生産性 = 60千円
(耕地面積10アール当たり
生産農業所得)

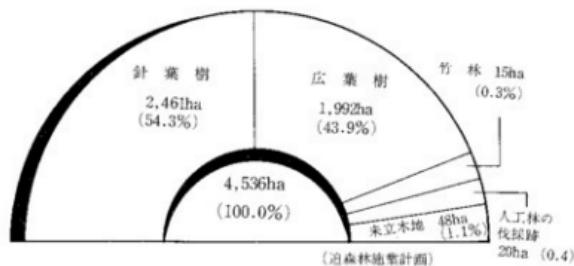
◇ 専兼別農家数



◇ 経営規模別収穫戸数(昭和49年2月1日調査)

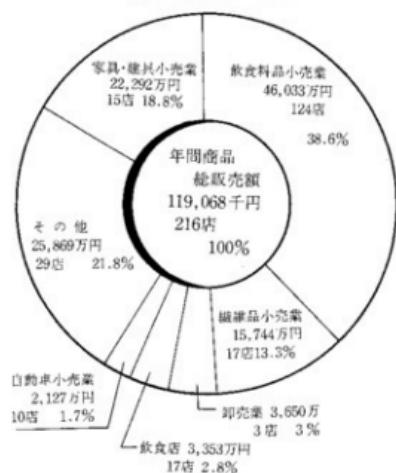


林業



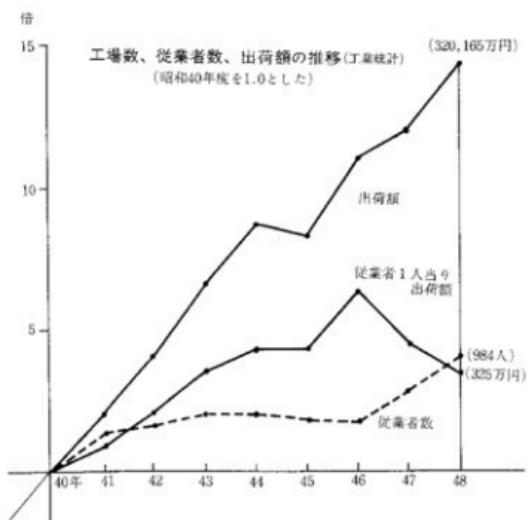
商業

業種別年間商品販売額(昭和47年商業統計)

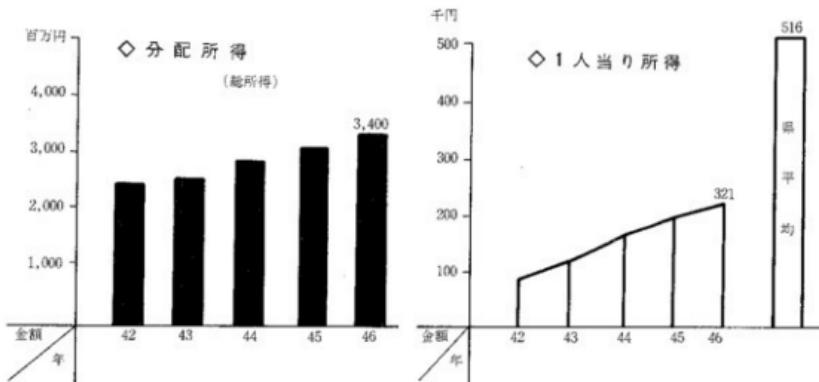


工業

工場数、従業者数、出荷額の推移(工業統計)
(昭和40年度を1.0とした)



所 得



② 指定の経緯

山王畠辺は、從来からその畑地などの表面に、縄文土器の破片や矢の根石等が出土していたので、遺物包含地であることは漠然と知られていた。

昭和37年7月に、明治大学文学部考古学教室の杉原莊介教授の第1次発掘調査によって、縄文晩期の土器、石器等が驚くほど多量に出土し、貴重な遺跡であることが確認されるに至った。

さらに昭和38年一迫小学校統合校舎を建築するためにボーリング調査したところ、多数の遺物が発見されたので、一迫町教育委員会は、日本考古学会員興野義一氏を発掘担当者として、昭和39年11月に第2次発掘調査し、このときに泥炭層から多数の遺物が出土し、豊富な遺物の包含層があることが認められた。

一迫町教育委員会は、なお詳細に学術調査の必要ありとして、昭和40年4月10日～6月8日まで、東北大学育成部考古学研究室伊東信雄教授に依頼して、第3次発掘調査を行ったところ、完土品約400点、石器約1,000点、装具約1,000点が出土した中に、漆器や編布なども含まれて、極めて貴重な遺跡であることが判明した。

しかし昭和45年、一迫町は公民館等を建築するにあたって、その敷地を山王畠に譲りたので、考古学関係者をはじめ、識者の間から猛烈な反省を求められて敷地を変更し、同年12月に文化庁に対し、緊急に国の史跡指定を申請した。

文化庁は専門職員を現地に派遣して調査の結果、文部大臣名をもって昭和46年9月9日付け、府令9の33号により、一迫小学校敷地や町道中道線の一部と、農道、農業用水路、神社を含む田畠を正式に史跡に指定し官報に告示した。

指定年月日 文部省告示第191号

文化財保護法（昭和25年法律第214号）第69条第1項の規定により記念物を史跡に指定する。

昭和46年9月9日

名称 出王畠遺跡

II 遺跡の考察

昭和45年一迫町公民館建設を契機として、山王岡遺跡保存運動が町民、考古学専攻生を中心に高揚した。そして昭和46年9月9日に、国の文化財保護委員会によって史跡指定の告示をされた。

一迫町ではこれを受けて、昭和46・47年度より国・県の補助金をもって、史跡指定地の買いあげ事業を進めた。このうち史跡指定区域内では、耕作がおこなわれず雜草・樹木が繁茂するようになった。このような状況の中で、町婦人会によって給食センターわきが花壇として整備されている。なお遺跡の西半部は、一迫小学校校舎（北側）とグラウンド（南側）であり、南端には山王考古館と山王神社がある。校舎の東方に付属して体育館と学校給食センターがある。山王考古館には、町教育委員会が主体で発掘したさいに出土した遺物が収蔵されている。

このような近況のなかで、この史跡の保護および地域社会における活用を目的として、史跡公園としての保存管理が計画された。その第一段階として、表面観察とボーリング調査によって、遺跡の立地と、遺物包含層のあり方を解明することとなった。

① 山王岡遺跡の位置と周辺の遺跡

一迫町真坂は、海岸線から40～50kmも入った内陸部で、仙台平野の北西部に位置する。この山あいに入りこんだ細長い平野部は、北上川の支流である一迫川によって形成されている。遺跡は一迫川とその支流長崎川の合流点付近の氾濫原に立地する低湿地遺跡である（第1図6）。遺跡の北部を通る町道中道線をさかに北方を道溝開、南方を山王岡と呼んでいる。標高は最高所が38mであり、周辺のもと水田地域（主に道溝開）との比高は2～3mである。史跡指定区域は南北約280m、東西約320mであり、総面積は約62,000m²である。遺跡の南北に迫っている丘陵部への距離はいずれも約600mであり、狩猟・採集の場を背後にひかえた場所といえる。一迫町内の遺跡分布を概観すれば、縄文時代晩期になると、山丁堀遺跡をはじめ、巻堀遺跡（第1図18）、上戸遺跡（第1図20）、青木畑遺跡（第1図22）などの大規模な遺跡が平野部に進出してきていることが看取される。気候寒冷化とともにならう縄文時代晩期海退と牛耕の変化に関連するのであろうか。一方おなじく晩期の大遺跡でも小古遺跡（第1図8）、向芳沢遺跡（同図10）、大衆遺跡（同図14）などは台地上に立地している。さらに同様な立地の同期の遺跡としては志戸森遺跡（同図1）、高田遺跡（同図9）、日向遺跡（同図11）、猿田原遺跡（同図12）、松西風遺跡（同図13）、千代子沢遺跡（同図15）などがあげられる。縄文時代晩期遺跡の分布をみると、花山湖東南の川口地区の遺跡群、それより約4km南方の遺跡群、そのまた東方約4kmの山王岡遺跡がある。それら遺跡群は約4kmの等間隔で所在し、それぞれには中心的な大規模で長期にわたる遺跡があるようである。集團のあり方とその領域を追究する上で興味深いものがある。今後の細密な分布調査と遺跡の基本構造を把握する調査を両面から推進していくなければならない。

また縄文前期の姥ヶ沢遺跡（同図17）、弥生時代後期天王山式土器を出土する上の原遺跡（同図16）が注目される。このほか縄文時代に属するが細かな時期の不明な妙円（同図2）、妙教寺（同

図3), 金矢(同図4), 上野(同図7), 諏訪神社(同図21)などの諸遺跡がある。

なお山王廻遺跡では、平安時代の土師器・須恵器の散布をみるが、遺跡の西方約1kmにある鶴町遺跡(奈良、平安時代)との関連が予想される。

② 山王廻遺跡に関する過去の調査

山王廻遺跡は古くより遺物包含地として知られていたらしく、昭和3年発行の日本石器時代地名表5版の陸前の部にその名が見られる。昭和23年元・一迫町長狩野文朗氏は、当遺跡の南端にある山王神社の東北わきに第1~3のトレンチを入れて発掘調査した。その後、昭和33年11月同氏は第4トレンチ(16×6m)を発掘した。第4トレンチからは、縄文時代前期大木3式、同中期大木9式、同後期南境式と宝ヶ峰式、同晩期は大洞B, B-C, C₁, C₂, A, A'の全型式期の土器・石器が出土し炉址が検出されている。さらに東北地方南部弥生時代初頭(大泉式)の上器と片刃石斧・アメリカ式石鎌などの石器、古墳時代後期の土師器破片を数点出土したという(狩野、1959)。

昭和37年7月明治大学考古学研究室によって初めて本格的発掘調査がおこなわれた。報告書は未刊であるが、大洞C₂式からA式にかけての豊富な資料がえられたようである。ついで昭和39年遺跡内に鉄筋校舎が新設され、屋体建設予定地となった表面に遺物散布の認められなかつた地点をボーリング調査中に若干の土器と獸骨がえられた。これによって工事による破壊をうける前に緊急発掘調査が必要となつた。一迫町教育委員会は地元に遺物を残すこととあわせて調査を実施した(興野1965)。その結果、中間に厚さ20cm以上の無遺物層をはさんで上部には、弥生時代初頭の大泉式、下部には大洞C₂式を中心とした一部A式を含む大規模な泥炭遺物包含層があり、貴重な遺物が多量に含まれていることがわかった。この成果の重要性から体育館予定地のより大規模な緊急調査が必要となり、本格的な発掘が昭和40年4月10日から6月8日まで東北大考古学研究室(伊東信雄教授)によって実施された。遺物包含層は確認できるものだけでも20層を越え、最上層は地表下50cmからはじまる初期弥生文化層であり、最下層は縄文晩期大洞C₂式層であった。その間には大洞A・A'式土器が主体的に出土する層も連続して存在した。出土遺物としては、完形土器約400点を始め、石器約1120点、装飾具約930点、その他漆器31点、編布2点が出土している。大洞C₂式期の泥炭層では、クルミ、トチ、クリなどの果皮が厚く層をなして堆積し、籠胎漆器が出土している。このような多量な土器、石器と通常遺存しにくい有機質の人工遺物さらに植物遺体、鹿、兔などの獸骨のほかに鳥類、魚類の動物遺体が多量に出土し縄文時代晩期後半の生活と文化を復元する貴重な資料を提供している。報告書の刊行が期待される。

昭和47年には一迫小学校のプール建設が、現在は交通教室となっている場所に予定された。現状変更許可申請を受けた宮城県教育庁文化財保護課は、遺構、遺物包含の有無などの調査のために、その部分の試掘調査を同年4月におこなった。約500m²の範囲を試掘し縄文時代晩期後半の遺物包含層(黒褐色粘土層)が検出された(図8)。その段階で調査は中止され、プールは現在の場所に計画変更し建設された。

③ 表面観察の結果

今回の山王廻遺跡の分布調査での表面採集区域は、道満開西南の一部(L-7区)、給食センタ裏の北東部の花壇(I-10区, H-11区, G-11区)と山王神社東側にある畠地(C-9区, B-9区,

C-10 区, B-10 区) である。一迫小学校グランド東側の台地一帯は、芝草が繁茂していたため地上観察は不可能であった。

④ 土 器

調査区域で表面採集したものとハンドオーガーでえられた(第2図-25)代表的な土器を拓影にしめし土器の概要をのべる(第2図)。採集した土器は縄文時代晚期後半と(弥生時代初頭), 平安時代に属するものである。縄文時代の土器は、晚期後半の大洞C₂式(第2図1~12, 14, 15), 大洞A式(同図16~24), 大洞A'式(同図25, 26)と思われるものである。上記の三型式のなかで大洞C₂式, A式に比定されるものが一番多く、次に大洞A'式と続く傾向がみられる。しかし発掘資料でないため正確な量的関係はつかめない。このほか丹塗り土器や復元すると約3cmほどになるとと思われる袖珍土器も採集されている。縄文はLR縄文を主体とし, RL縄文の約3倍である(同図4, 8, 9)。また羽状縄文を施した土器も少量ではあるが散布しており, LRとRLの縄文原体を回転させている(同図14)。8, 14などの粗製土器片は晚期前半期に多くみられるものであるが、発掘資料よりみるならばC₂式に伴なっても発見される。やはり大洞C₂式に含まれられるものであろう。また今回は大泉式と断定しうるような土器片はえられなかった。さらに内黒で回転糸切痕のある土師器、糸切痕をもつ青灰色の須恵器が十数点づつ採集されたが、これらは平安時代のものと考えられる(同図27, 28)。

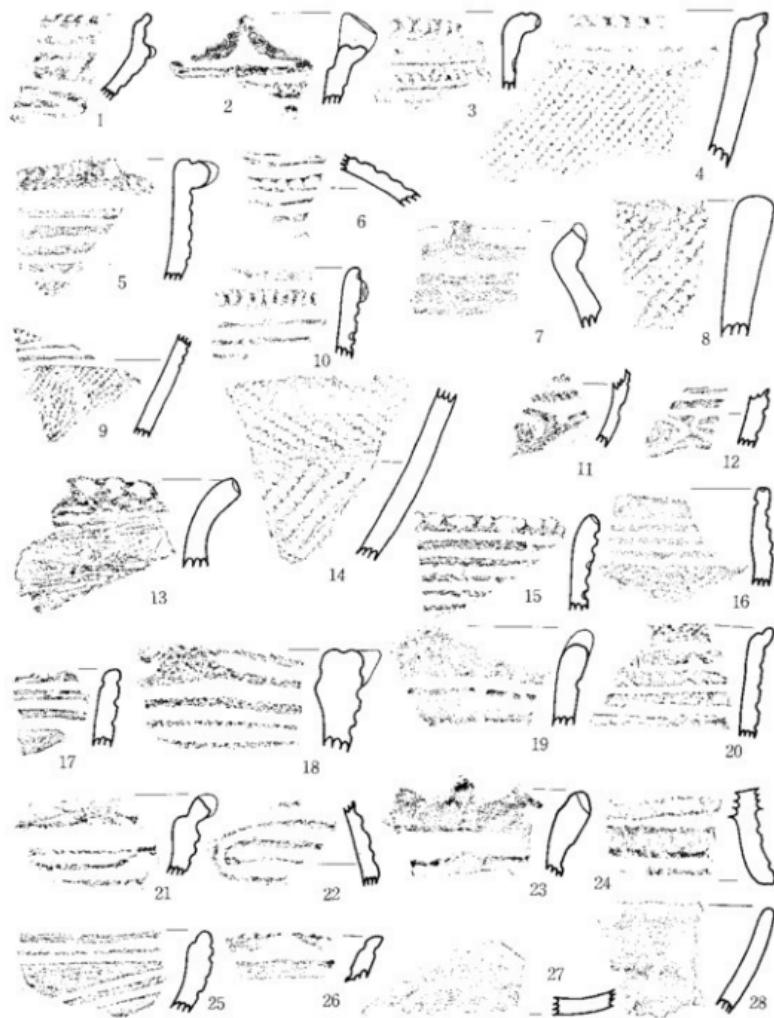
土器の散布状態は、I-10, H-11, G-11区(註:区の名称は区の北西隅となる交点の名称をあてる)に密集しており、特にH-11とG-11の両区が著しく、H-11区では大洞C₂式~A'式、土師、須恵器にわたって全般的に採集されている。またC-9, B-9区も密集しており、とくに両区の境界付近が著しい。ここでも若干の土師器片がえられ表面観察の可能な地域には、縄文の分布とは複合して散布する。いずれの発掘においても平安時代のプライマリーな包含層はみとめられず、弥生時代初頭からしばしば洪水にあってことから考えあわせれば、定住的な居住はなされなかつたが、生活しても流されてしまったのであろう。上記の二つの土器密集地域が連続するのかどうかは、地上観察の不可能であった地域が広範囲にわたって介在するので明瞭ではない。しかし両地点間に設定された明治大学発掘地点(第8図)とボーリング調査地点より遺物包含層の存在が確認されており両者は連続するものと思われる。なお道溝面のL-7区からも若干の土器が採集されている。

⑤ 石 器

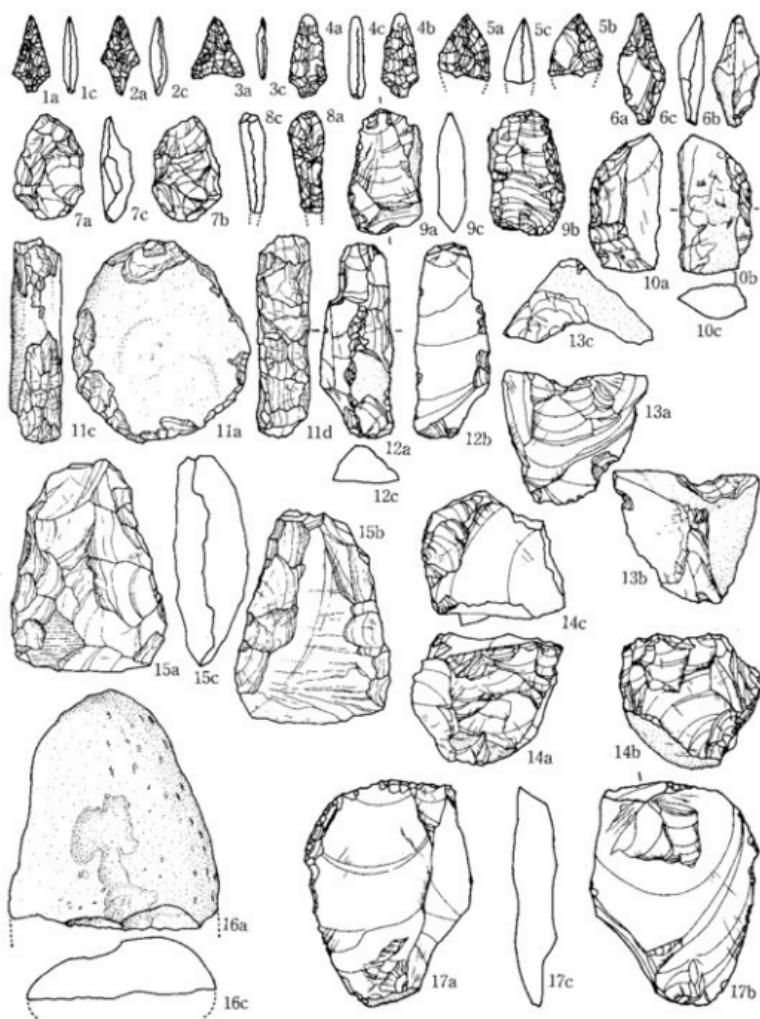
表面採集で得られた石器類は、石鏃(16), 石鏃未成品(2), 小形尖頭器(2), 石錐(2), ピース・エスキュー(2), ピース・エスキューのスボール(2), 核(6), 周辺加工のある礫(1), 打製石斧(1), 凹石(1), 小玉(1)などではほかに二次加工ある剝片や使用痕ある剝片、剝片、石屑、スレート片、原石などを多数採集した。石質は頁岩、鉄石英がめだら若干黑曜石がみられる。すべて表面採集品であるから個々の遺物がどの時代に所属するかは不明である。しかし縄文時代の大洞C₂式期から弥生時代の大泉式期までの間にそれらが所属するはずである。

石器の散布状況は土器片と同様な方を示す。

石鏃には有柄のものと無柄で凹基のものがある(第3図1~4)。4は先端部が消耗しており、



第2圖 山王凹道跡表面採集土器



第3圖 山王町遺跡表面採集石器

石錐を転用し錐の機能を果していたと思われる。5は黒曜石製の小形両面加工エポイントである。(1), 四面(1), 小玉(1)などではかに二次加工ある剥片や使用痕ある剥片, 剥片, 石屑, スレット片, 原石などを多数採集した。石質は頁岩, 鉄石英がめだち若干黒曜石がみられる。すべて表面採集品であるから個々の遺物がどの時代に所属するかは不明である。しかし縄文時代の大洞C₂式期から弥生時代の大泉式期までの間にそれらが所属するはずである。

遺物の散布状況は土器片と同様なあり方を示す。

石錐には有柄のものと無柄のものがある(第3図1~4)。4は先端部が磨耗しており、石錐を転用し錐の機能を果していたと思われる。5は黒曜石製の小形両面加工エポイントである。6は石錐未成品と思われる。7はおそらく両面加工された粗雑な小形尖頭器または石錐未成品であろう。8は石錐で横断面が菱形を呈し、先端部は欠損している。9はビエス・エスキュー(楔形石器)である。さらにこれを転用してb面左側に二次加工を施しスクンバイバーとしている。上下からの剥離面には両極剥離の痕跡がみえる。10, 12, 17は二次加工ある剥片と分類しておく。10は側刃が交差剝離によって調整され、相対する刃に使用痕が残っている。したがって10a右側刃が刃部であろう。17は大きな剥片を素材にしたもので17aの左刃に二次加工がなされている。この剥片には表面、主要剥離面ともに両極剥離の痕跡が残っている。11は周辺加工のある砾である。扁平で円形の自然砾に両面から乗重方向の剥離がほぼ全周に加えられている。発掘調査によつて数百点におよぶ多量な資料がえられている。晩期後半に普遍的にみられ、石錐、敲石の機能をもつといわれるが不明である。13, 14は石核である。13は13cを打面として大きく1枚の剥片を生産している。14は打面が2面(14cと14bの右面)設定されており、それらは直交する。ともに半撃打面であり、それから連続的、規則的な剥片生産がおこなわれている。15は安山岩製の打製石斧で表面がすこし風化している。15bには大きく第1次剥離面が残されており、剥片素材と思われる。

④ ポーリング調査の結果

ハンドオーガーは約30cmづつ土を採取できる器具であり、大きな礫などの障害物がないかぎり、深さ5m近くまでの地質調査が可能である。このハンドオーガーによる調査の目的は、基本的層位の確認と遺物包含層の分布を明らかにすることであった。そのため調査区域全域に20m方眼をかけ、その交点を調査地点とし、とくに必要な場合はその中間点をとり調査を実施した。

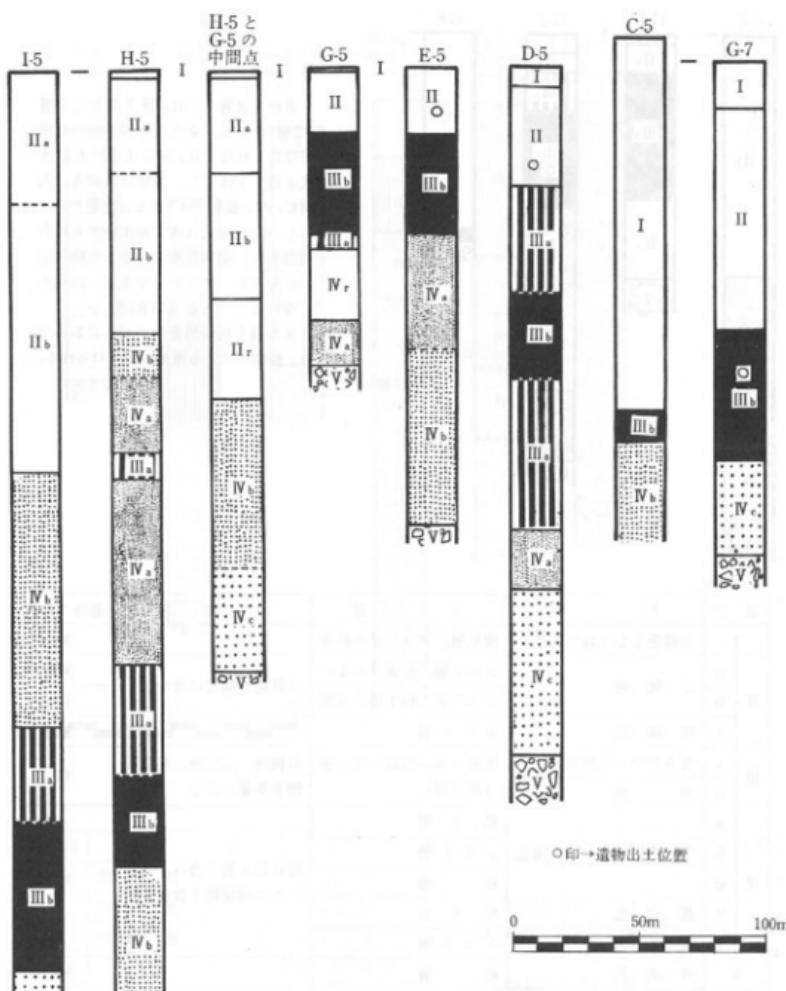
便宜上調査区域を(A)グラウンドおよびその周辺地区、(B)芝草地および学級園地区、(C)道溝開地区に分けて調査の成果をのべることにする。

(A) グラウンドおよびその周辺地区(第4・5図)

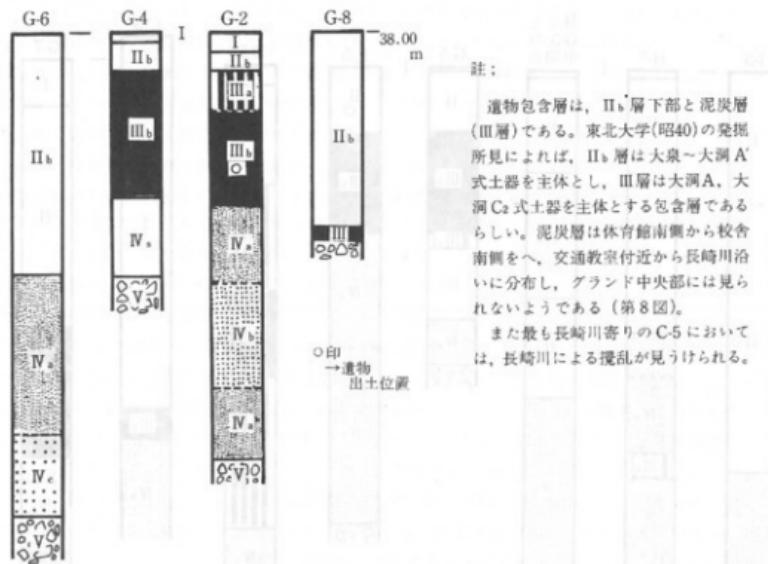
基本的層位は柱状図にある通りI~V層である。砾層(V層)はグラウンド中央部で深さ約1m 20cmと最も高く、校舎側および長崎川沿いに向かうにしたがって低くなっている。それに応じて泥炭層(III層)も厚く堆積している。とくに校舎の南側では砾層まで4m以上もあり、泥炭層も深く厚く堆積し、間層としてIV層(青灰色粘土層、シルト層)をはさんだり、泥炭層の上にIV層が堆積したり特殊な様相をしめしている。

(B) 芝草地および学級園地区(第6図)

砾層はグラウンド地区よりも高く1m 20cm~2m 50cmの深さである。主な遺物包含層であるIII層は泥炭化しておらず、ほとんどの場合深さ1mまでに堆積している。大部分の地域では



第4図 クラント及びその周辺地区の柱状図



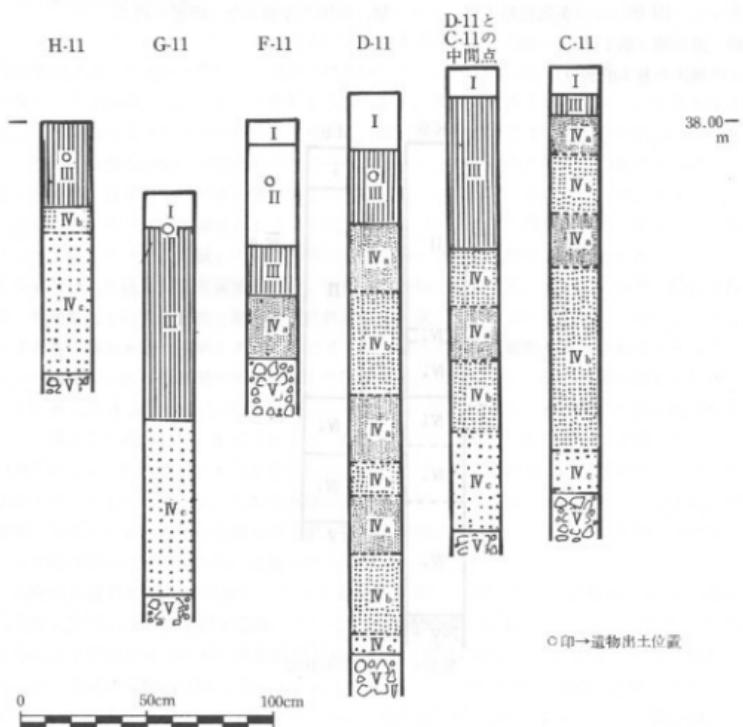
註:

遺物包含層は、II_b層下部と泥炭層(III層)である。東北大学(昭40)の発掘所見によれば、II_b層は大泉~大洞A式土器を主体とし、III層は大洞A、大洞C_a式土器を主体とする包含層であるらしい。泥炭層は体育館南側から校舎南側をへ、交通教室付近から長崎川沿いに分布し、グランド中央部には見られないようである(第8図)。

また最も長崎川寄りのC-5においては、長崎川による擾乱が見うけられる。

層位	土色	土質	包含物	遺物の有無
I	黒褐色もしくは灰褐色	擾乱層、グランドの砂層		無
II	赤褐色	シルト層、しまりがない	褐鉄鉢を縦状に含む	無
		シルト層と粘土層の互層		
r	暗褐色	シルト層		無
III	青みがかった黒色	水分の多い均質な粘土層 (泥炭層)	有機物、炭化物、高鈴小僧を多量に含む	有
	黒色			
IV	主に青灰色まれに茶褐色	粘土層	褐鉄鉢を若干含み、まれに木の腐植物を含む	無
		シルト層		
		砂層		
	r	粘土層		
	s	シルト層		
V	青灰色	礫層		無

第5図 グランド及びその周辺地区的柱状図と層序の説明表



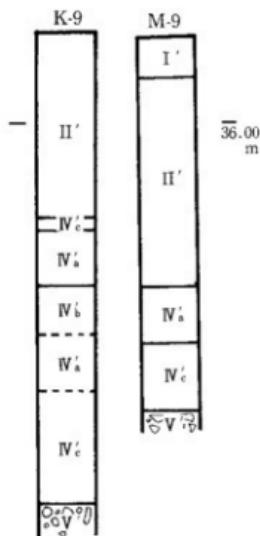
層位	土 色	土 質	包 含 物	遺物の有無
I	黒褐色	擾乱層		有
II	赤褐色	シルト層	褐鉄鉢を含む	有
III	暗褐色	シルト層	有機物、炭化物を含む	有
IV	黄褐色	粘土層	褐鉄鉢、小甕を多量に含む	無
		シルト層		
		砂層		
V	黄褐色	礫層		無

第6図 芝草地及び学級園の性状図と層序の説明表

侵蝕によって II 層の堆積は認められない。この遺物包含層は芝草地、学級園、山王考古館付近に分布する。III 層以下は黄褐色粘土層、シルト層、砂層の互層となり疊層へ続く。

(C) 道溝団 (第 7 図)

この地区の基本的層位は



第 7 図 道溝団の柱状図

II'; 耕作土層

III'; 灰褐色シルト層 (下部に遺物、褐鉄鉱を含む)

IV'; 青灰色粘土層 (IVa), シルト層 (IVb) 砂層 (IVc) の互層 V'; 疊層である。

(A) 地区の I~V 層と (B) 地区の I~V 層は明らかに対比することができるが、これらと道溝団の I~V' 層は中間地域が調査不能であるため直接的な対比はできない。しかし、可能性としては、おもに次の二事が考えられる。① II', IV', V' 層が A, B 地区の II, IV, V 層と対比され、泥炭層は形成されなかった。② I~V' 層とも新しい時期に形成されたもので V' 層の下部に泥炭層がもぐり込んでいる。各地区の基底疊層最高所の標高は、A, B 地区ともに約 37 m であるのに対して、C 地区はそれより低い約 35 m である。また C 地区の疊層は M-9 地点を最高所に南北に低くなる自然堤防地形を呈する。したがって体育馆下が後背湿地となって最も厚く泥炭層が形成されているのであろう。また II', IV' 層より若干の土器片と石器 (第 3 図 12) が出土しており、一次堆積と考えられる。以上より①である可能性が高いが、今後の課題といえよう。またハンドオーガーによる調査があくまで点の調査であるため、その広がり、性格をつかめない層 (グラウンド地区の II_r, VI_r, IV_s 層) もある。

⑤ 遺跡の構造的理

ハンドオーガーによるボーリング調査によれば基底疊層は、遺跡全域に広がっている。縄文時代晚期前にはこの遺跡一帯は、一迫川の氾濫原であった。人間の住める環境ではなく洪水により砂礫がたえず堆積していたものと思われる。しかし、晩期になると砂やシルトが堆積する比較的安定した地域となったことが層序より窺える。縄文時代晩期後半になって比較的高い所は干上がり、周辺の潤滑な地域には泥炭層が形成されていった。このころ人間がこの地に住みはじめ、周辺の泥炭層に日常の生活用具や食料残渣などを廃棄しはじめた。泥炭層は、沼、入江のような水の流れにくい所で寒冷な環境のもとで形成される。それは植物が腐敗するさい生成された腐植酸によってバクテリアが死滅して腐敗作用が止み、もっぱら炭化作用がおこなわれる。したがって形成過程に入り込んだ通常腐植しやすい有機質の資料を保存する。すなわち編布、籐胎漆器、木器、骨角器などの人工遺物と動植物の自然遺物が多量に出土するのである。当時の食生活を始めとする各方面の未知な事柄をあきらかにする上で極めて貴重な資料が提供されるであろう。ボーリング調査によれば泥炭層形成過程にも数度の洪水によるシルト、砂の堆積が認められる。

その後大洞 A' 式期から弥生時代初頭には褐鉄鉱の混入が非常に多くなり、黄灰褐色を呈するシルト層がこの地域一帯に形成されるようになる。シルト層とは微砂質の堆積層であり、一迫川の氾濫によって形成されたものと思われる。しかし、通常は比較的乾燥した土地で人間の住める状況にあったものであろう。なお当遺跡の層位は砂層、シルト層、火山灰層などが介在し明瞭な鍵層になるとともに遺物包含層を細分する場合も有効である。したがって、各期の遺物群、ひいては文化の細かい変遷が詳細に把握される可能性がある。

表面採集資料によれば給食センターと町道中線間の花壇、山王神社東側の畠地には縄文時代晚期大洞 C₂～A' 式土器が散布している。I-10, H-11, G-11 区と二地点に遺物のやや濃密に分布する傾向が見られるが表面観察が容易な狭い地域に限られての観察である。過去の調査によれば現在体育馆の地域は大洞 C₂ 式～大泉式にわたる約 2 m の遺物包含層があることが判明している。そこからさらに山王神社にかけて遺物包含層が分布している。また遺跡西方（交通教室）に遺物包含層が長崎川沿いに延びていることが知られている。山王遺跡における遺物包含層の広がりと泥炭層の分布は第 8 図のようになる。したがって泥炭層中に遺物が含まれていると推測されるのはそれらが重っている地域である。体育馆付近は道溝周囲に広く深くなり、グラウンド・ネットアタリを頂点とする沢状の窪地であった。そこに厚く泥炭層が形成され種々の物が廃棄されたのであろう。縄文時代晩期後半（今から約 2500 年前）において乾燥した土地すなわち居住に適した場はグラウンド中央部の狭い部分と給食センター周辺から山王神社を結ぶラインより北東方面的遺跡東部の平坦地に可能性をみいだす。換言すれば居住地群存在の可能性はここにあるだろう。昭和 33 年発掘の第 4 ドレンチ内検出の炉址はこの推定を裏付ける。時期別に遺物分布の偏りをみると山王神社北方、体育馆下とその周辺、学級園には大泉式土器片の出土をみる。また大洞 C₂ 式～A' 式期の遺物は遺物包含層のあるところではすべて出土するようである。細かな点では分布の偏りはあったのであろうが、正式な発掘調査なしではこれ以上のことはいえない。なお山王田遺跡には、縄文時代晩期のはかに縄文時代前期人木 3 式、中期大木 9 式、後期南境式と宝ヶ峰式、晚期大洞 B 式、同大洞 B-C 式、同大洞 C₁ 式期の遺物が認められたとする見解がある（狩野；1959）。しかし、正式な発掘調査や今回の表面観察では確認しえなかつた。も

しこの遺跡での生活の開始が縄文時代前期中葉（今から約 6000 年前）にまで遡るならば、泥炭層の形成時期の問題、前期における生活環境などの問題はより複雑化する。

また道溝囲地城は今回の調査を多量に含んだ地層の存在の可能性は薄くなったものの、疊層下に厚い泥炭層が存在する可能性を残している。・追川に向ってひらけた地域であり、当時生活の糧をえる漁撈の場として重要であったと思われる。独木舟などの出土が期待される。

参考文献

- 1959, 3 荒野義章 宮城県栗原郡一迫町山王遺跡の調査 一迫町古代史第二輯（がり刷）
- 1960, 9 荒野義章 宮城県栗原郡の古代遺跡の研究 宮城県の地理と歴史 2 pp. 132~144
- 1965, 2 一迫町教育委員会 宮城県栗原郡山王遺跡調査報告書
- 1965, 5 荒野義一 宮城県山王遺跡出土の弥生式土器について 日本考古学協会第 31 回総会研究発表要旨 p. 7
- 1965, 10 伊東信雄、芹沢長介、伊藤玄三、林謙作、下藤雅樹 宮城県山王遺跡の発掘 日本考古学協会昭和 40 年度大会研究発表要旨 p. 10
- 1966, 6 伊東信雄 縄文時代の布 文化 30-1 pp. 1~20



写真1 遺跡の南西、山王より体育館を望む



写真4 ポーリング風景



写真2 遺跡の北方道満畠より校舎を望む



写真5 ポーリング風景



写真3 遺跡の東南より校舎を望む

III 保存管理の方針

山王廻遺跡が、ただたんに保存されているだけでは史跡指定の意義がない。

史跡を破かいから守り、調査研究によってその価値を高め、種々な活用の道を開くことも必要であるが、たくさんの人びとの目にふれることによって、歴史に対する関心や郷土の史跡に対する愛着を培うことも大切である。栗駒山が眺望され、長崎川と一迫川の合流地点に位置する自然的環境の最たるところであり、遺跡の中には、山王廻からの出土器2,000点を収蔵する山王考古館があり、また小学校のすぐ西側には、遠い時代の農民が住んだ「かやぶき」の農家も復元したなかに、農具をはじめ、生活用具等数百点を陳列した「歴史民俗資料館」も建設され、これらと一体化をねらった歴史的文化的要素を加味しながら、極力山王廻遺跡の現況を変更しないことに留意し、史跡公園としての保存管理にあたるよう努力する。

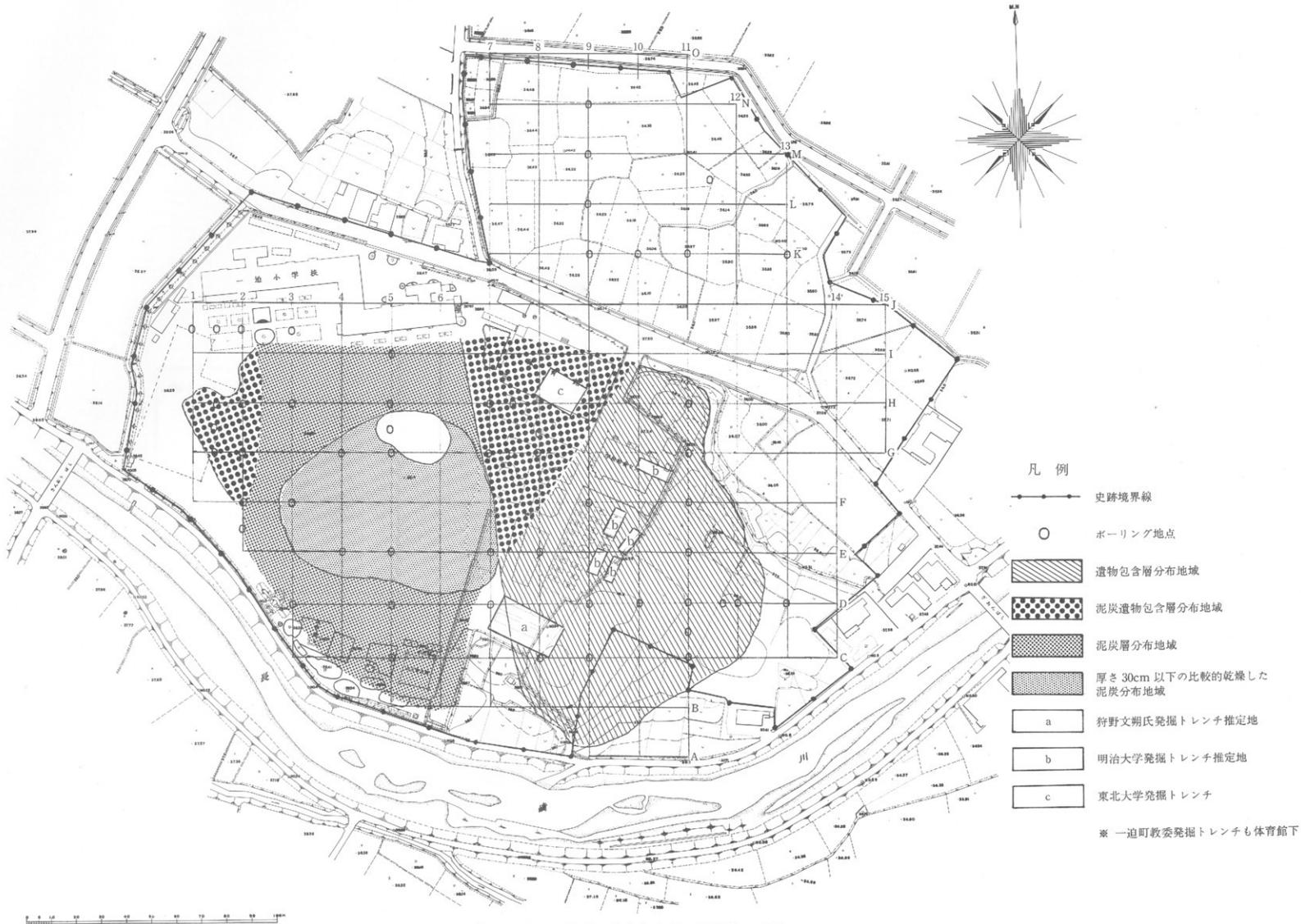
また小学校敷地の保存管理にあたっては、次の点があげられる。

昭和38年に一迫小学校統合校舎を建築した当時の児童数は1,108人の大規模小学校であったが、現在はその数が激減している。即ち昭和45年には602人、昭和48年491人、昭和50年には479人で今後もおおよそ横ばいの状態が推定されるので、校舎の増築も必要がなく、鉄筋コンクリートのため、修改築もないものと思料される。

また付属建物の倉庫、自転車置場、学校給食センター、学校プール、交通安全教室、遊具等は完備しているので、今後の問題は花壇等のほり起しや造成にあたっては、地下20cm程度を限度とし、つとめて学園としても公園としても現状を破壊しないことに配意する。

史跡 山王廻 遺跡平面図 宮城県一迫町

指定年月日 昭和46年9月9日



第8図 山王廻遺跡の遺物包含層・泥炭層の分布

昭和 51 年 3 月 20 日発行

一迫町教育委員会

宮城県栗原郡一迫町真坂字

田川前 5

電話一迫 (02285)②3141

印 刷 (有) 楽館印刷

